

図書館だより

Library News No.67

Nara National College of Technology

2010年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



上段・下段左・下段中央：読書週間展示の様子。下段右：ブックハンティングの様子。

目次

巻頭言 知識と概念、そして読書	2
読書週間アンケートについて（報告）	3
平成 21 年度読書感想文コンクールを終えて	4
読書感想文入賞作品紹介	6
学生会図書委員によるブックガイド	15
図書委員会活動報告	16

『知識と概念、そして読書』

機械工学科主任 矢尾 匡永

私は、奈良高専の学生が全国の高専の中でも極めて優秀であると考えている。奈良、大阪、京都、滋賀、三重、和歌山など近畿地方のかなり広い地域から、受験を経て合格してくる上に、多様な文化圏・価値観を持つ学生が一同に会して勉強するのであるから、十分に採まれるのは必然である。海外からの留学生との交流を含め、多様な人間関係に直面することは大変重要なことである。学生諸君に、自分では当たり前と思っていたことが、クラスの他の人にとっては当たり前のことでなかったという経験があるのではないだろうか。何気なしに人に投げかけた言葉が、他の人にとって耐えられない言葉であり、投げかけた本人にはなぜ他の人がそのように反応するかわからなかったことがないだろうか。寮生の諸君は、日常生活を共にしているので、このような経験をしたことが必ずあると思う。ここで重要なことは、自分が当たり前と考えている言葉に含まれる概念が、他の人にとっては当たり前の概念ではなく、概念の共有には、当事者同士の会話が唯一有効である。例えば、人は読書を通していろいろな知識を得る。しかし、知識の根底にある概念を、人は本からは得ていない。なぜなら、人にとって未経験の概念を本から想像することは非常に難しい作業であると考えられるためである。人は生まれて、まず家族の人から人として生活してゆくための概念を教えられ、その後、幼稚園・小学校・中学校で教員や友人との会話の中で次第に成長してゆくのである。人は人間関係の中でいろいろな経験をして、採まれ向上してゆくと私は考えている。進級して、真新しい教科書を開いてみたとき、本を読むだけでその内容を深く理解することはほぼ不可能である。それができるのなら、学校は必要ない。学校は知識を通して、専門科目や教養の概念を学生諸君に教授しているのである。カリキュラムは、広い範囲の概念を効率的に学生に与えることを目的に組まれていて、学校卒業後にその概念をもとに新たな知識が蓄えられ、人との会話の中で、また新たな概念を吸収するための準備がなされるのである。その人にとってまったく未知な概念は、自ら本を幾ら読んでも理解できないものである。地球人と宇宙人にとって物理や数学は共通の言語かもしれないが、数学や物理の概念はやはりだれかに教えられないと理解できない。

学校では、知識を与えるのが重要と考えられがちである。かつて学生であった我々の過去の経験から、授業の中身はそれ程覚えていないけれど、先生や友人と一緒に遊んだり、何か人生の中で大事なことを人から教えられたことは深く記憶に残っている。この経験から、学校というのは、知識以上に概念を提供する場であり、学生諸君同士あるいは学生諸君と教員との会話を通じた概念の共有が重要である。そのためには、教員は学生諸君と触れ合う時間を大切にしよう心がけなければならないし、学生諸君は周りの人と積極的に係りを持ち、その経験をもとに一層の知識を得るよう読書することが必要ではないだろうか。

参考の為に（広辞苑より抜粋）

知識：認識によって得られた成果。広義では、事物に関する個々の断片的な事實的・経験的認識の意、厳密な意味では原理的・統一的に組織づけられ、客観的妥当性を要求しうる判断の体系。

概念：事物の本質をとらえる思考の形式。経験される多くの事物に共通の内容をとりだし（抽象）、個々の事物にのみ属する偶然的な性質を捨てる（捨象）ことによるとするのが通常の見解である。

読書週間アンケートについて（報告）

情報メディア教育センター副センター長（図書担当） 鍵本 有理
図書委員 2 I 山本 賢佑

毎年、「抽選で3名様に図書カードをプレゼント！」といううたい文句のもと、読書週間の展示を見てもらった学生に記入をお願いしているアンケート。今年度は70名の学生からの回答がありました。その集計結果をここに紹介します。

「あなたは何で読書週間を知りましたか」については、ポスターを見て、あるいは実際に図書館の展示を見て知った人が多かったようです。ポスターは2 I 矢鋪知哉さんの力作でした。また、展示期間を延長したのもよかったようです。

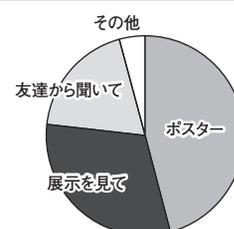
「あなたの読む本のジャンルは？」（複数回答可）については、小説（30）に次いでSF・ファンタジー（16）が多く、その他ライトノベル（11）、専門書（10）となっています。

お気に入りの本を自由に書いてもらったところ、小説では「火車（宮部みゆき）」「囃う伊右衛門（京極夏彦）」「1Q84（村上春樹）」他、山田悠介、伊坂幸太郎、また人気の「図書館戦争シリーズ（有川浩）」「空の境界（奈須きのこ）」「ダレン・シャンシリーズ」「ハリーポッターシリーズ」「とらドラ！（竹宮ゆゆこ）」等、紹介しきれないほどの回答がありました（勉強熱心なのか、「高専の数学」などを挙げてくれた学生もいました）。

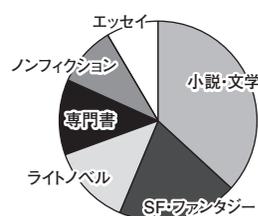
また、「月に何冊読みますか」という問いには、1冊以上～5冊は読むという学生が、半分以上いました。アンケートの設問が自由記述であったため、かなり幅のある回答になってしまったようですが、読書週間の展示を見てくれた学生はおおむね本に親しんでくれているようです。来年度も同様の企画を考えています。ぜひ図書館に足を運んでください。

（なお、アンケートについて、回答した学生の氏名等は学生図書委員には分からないようにして分析処理をしています。）

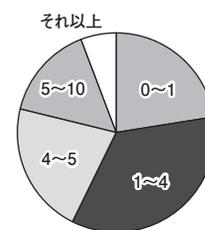
何で読書週間を知ったか



読む本のジャンル



月に何冊、本を読みますか



（自由記述のため、数値が重複）

多読表彰について

図書館では、毎年、4月から12月までの統計結果に基づき、1人あたりの貸出冊数が多かったクラス・専攻を表彰することになっています。今年度は下記のクラス・専攻が受賞しました。

- | | | |
|-----|------------|---------|
| 第1位 | 化学工学専攻2年 | (37冊/人) |
| 第2位 | 機械工学科5年 | (35冊/人) |
| 第3位 | 機械制御工学専攻1年 | (28冊/人) |
| 第4位 | 電子制御工学科4年 | (26冊/人) |
| 第5位 | 機械工学科4年 | (24冊/人) |
| 第6位 | 物質化学工学科4年 | (22冊/人) |



授賞式は1月7日（木）昼休みに校長室にて行われました（次ページの写真をご覧ください）。

なお、副賞は各クラス・専攻での希望図書購入の権利です。来年度も学生の皆さんが図書館を大いに利用してくれることを期待しています。

平成21年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第34回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。学生の皆さんから、1年生193編、2年生166編、3年生11編と合計370編の応募がありました。これは昨年度より40編ほど多い数です。情報メディア教育センター運営委員会の教員（8名）と国語科教員（3名）による審査・投票の結果、その中から次のように9名の入選作を決定しました。すでに1月7日の全校集会放送でもお知らせしましたが、以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉を讃えたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品もあります。その佳作となった学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞

該当なし

優秀賞

機械工学科	1年	南 蒼一郎	夏の夢
電気工学科	1年	名加 玲奈	見えない壁を破るとき
物質化学工学科	1年	黒田 寛人	「走るを通して」
物質化学工学科	1年	松下 由賀子	『強い』とは —「風が強く吹いている」を読んで—
電子制御工学科	2年	光崎 将人	生きるということ
情報工学科	2年	土井 猛	十五才を読んで、十六才が思ったこと
物質化学工学科	2年	加藤 豊	「黒・白・赤・青・黄……」
物質化学工学科	2年	松本 明日香	人間の資格とは何か
電気工学科	3年	西村 佳那子	悪童日記三部作を読んで

佳作

1 M 下住 大樹	1 E 村田 真奈美	1 S 徳島 大悟	1 S 豊島 健太
1 S 原 拓也	1 S 福島 悠太郎	1 I 中野 啓太	1 I 西 潤也
1 C 阪田 敬	1 C 小松 画楽	2 M カーン 直人	2 M 野村 亜未
2 M 向井 友哉	2 E 佐藤 克哉	2 E 宮本 直典	2 E 森川 雄介
2 S 浅田 拓斗	2 C 上野 新	2 C 吉田 透	3 I 山口 浩基
3 I 辰己 晃司	3 I 長谷川 樹		

以下、それぞれの入選作品について、簡単に講評しておきます。

まず読書感想文をまとめる時、大事なのはやはり、自分の体験から、身の回りに引きつけて考えることです。本の内容をふまえ、自分の考えを自分の言葉で述べてもらおうと、読み手にもその思いは伝わるはずですよ。

「どうして、学校に行かなければいけないのか。」2 I 土井さんは、この誰もが一度は思った疑問から書き出しています。その答えについては、土井さん自身も明記していません。「それを見ることができるのは、ゆっくりと一步一步、自分の足で歩いている人だけ」だからでしょう。

3 E 西村さんは、一冊に絞らず、シリーズ三部作を取り上げました。ハンガリー生まれの女性亡命作家による、戦争の時代からその後の厳しい支配の続く時代を描いた本で、自身も「うまく仕舞えないもどかしさ」と書いているように、内容はまとめ切れていませんが、過酷な時代を生きた双子の兄弟の生き方を通して、事実と向き合

うことについて考えています。

学生に人気のある作家、森絵都の「カラフル」を読んだ2C加藤さん。面白い書き出しで、「色」をキーワードに、読み手にわかりやすく素直にまとめています。同じく「カラフル」の2S光崎さん。こちらはタイトルのように「生きること」について、自分の考えをストレートに書いていて、やはり好感が持てました。

また、「風が強く吹いている」を取り上げた1C黒田さんと松下さん。これも同じ本で2名の受賞者が出ましたが、読んでもらうとわかるように、二人とも自身の「走る」体験を持っており、それぞれ「強い」「好き」を中心に、違ったまとめかたをしており、甲乙つけがたかったものです。

昨年は太宰治生誕百年の年に当たり、また授業で「富岳百景」を読んだことも影響したのか、太宰治の作品で応募したものがいくつかありました。その中で受賞した2C松本さんの作品。「人間失格」の主人公葉蔵に足りなかったものを考え、最後に「救い」についても述べています。

1M南さんは村上春樹の本を取り上げました。高校1年生に相当する学生が、この本で感想文を書くのは難しいのではないかとも思ったのですが、ちょっと不思議な、印象に残る文章であり、自分の言葉で考えを深めています。村上作品において、例えば主人公が女の子と「ゆっくり歩く」とあるのは、その女の子に対する愛情表現なのだという評論家の指摘がありますが、南さんはそのあたりも読めているところがなかなか鋭いと思いました。

映画にもなった田辺聖子の「ジョゼと虎と魚たち」を読んだ1Eの名加さん。テーマとしては結構重いものですが、私たちの身の回りにある「見えない壁を破る」(その壁自身、実は私たちが知らず知らず作ってしまっているものですが)ジョゼの「すごい」ところに素直に感動し、単なる恋愛小説ではないことにも言及しています。

今年度は小説、しかも最近の作家だけでなく以前から「名作」といわれているものに挑戦したものもかなりあり、皆さんが本に親しんでいる様子がうかがえました。一時、5年ほど前はノン・フィクション系が増えたのですが、また文芸作品のほうに回帰しているようです。これからもいろいろな分野の本を読んでほしいと思います。

最後に、多数の応募作が寄せられたことに感謝するとともに、次回も引き続き学生の積極的な取り組みに期待します。

(国語科：鍵本)

皆さんへの注意とお願い！

毎年、読書感想文コンクールに多数の学生が参加しており、情報メディア教育センター運営委員会としても非常にうれしく思っています。しかしながら残念なことに、応募してくれた作品の中には、インターネット等に出ている感想文や書評、その他いわゆる読者レビューなどを写したのを見受けられます。

「参考にしただけ」という意識の人もあるようですが、やはりそれは「盗作」であり、学生としても社会人としても許されないことなのです。あとがきなどから「引用」する場合は、引用であることを明記する方法があります。日頃のレポート等も含め、拙くても「自分の」文章を書くように心がけてください。



読書感想文入選者と多読表彰クラス代表の皆さん（校長室にて）

読書感想文入賞作品

『風の歌を聴け』

村上 春樹 著

夏の夢

1M 南 蒼一郎

僕は夏休みになるたび、すべてが無くなってしまふような気がする。とくに今年はどうしても一日一日をムダにすり減らしているような気がしてならない。そういった意味で僕はこの小説との接点を感じた。一度中学生の時に読んだ事のある本だったが改めて読んでみることにした。改めて読んでみるといろいろとを感じる事があった。それについて書いてみる。

主人公が夏休みに故郷の町に帰省し、友人の「鼠」とビールを飲んでいる場面からこの小説は始まる。僕も今実家に帰ってきているところだ。そして「鼠」のような親友も一人いる。寮での厳しい生活から考えれば家は天国に近い。

高専でできた友達と遊ぶのも楽しいが、やっぱり昔から一緒に過ごしてきた中学時代からの友達と遊ぶ方が楽しい。しかしその瞬間を捉えると、とても楽しいが、夏休み全体として考えると、決してそうとは言えない。去年までの夏休みはもっと楽しいものだった気がする。「しかしそれはまるでずれてしまったトレーシングペーパーのように、何もかもが少しずつ、しかし取り返しのつかなくらい昔とは違っていた。」おそらく僕は遠い昔の夏の夢を見ているのだろう。それはすでに損なわれたもので、二度とは戻って来ない。おそらくこの夏も来年になれば損なわれ、二度と戻ってこない淡い夏の夢になるのだろう。しかし結局、人間とは何かを失い、踏みじりに、見捨て、犠牲にし、裏切りながら生きていくものなのではないかと思う。そして人は失うことから何かを学ぼうとするが何も学ぶことはできないし、仮に何かを学んだとしても次に何かを失う時には何の役にも立たないのだ。主人公はそういった気

持で夏を過ごしていたのではないかと思う。

この小説は「愛」と言うものもひとつの重要なテーマになっていると思う。主人公は「愛」と言う言葉に対してどこか冷めていて、関心がないように感じる。結局、「指が九本しかない女の子」の事を愛していたかどうかはわからない。主人公は常に淡泊で、これといった愛情表現をしたりせず、ただ一緒にいるだけという感じで、「愛」というものが全く感じられない。でももしかしたらそれが主人公の愛情表現なのかもしれない。ただ一緒にいる事もひとつの愛情表現なのだと。一方鼠は、感情がとても表に出ていて、浮き沈みの激しい性格のように思う。おそらく鼠は恋に対して情熱的なのではないかと思う。家柄的に鼠は裕福な家の息子だが主人公はごく普通の家の息子。二人は正反対の性格で、暮らしてきた環境も全く違うのになぜ親友になりえたのだろう。それはおそらく二人とも相手が持っていないものを持っていたからだと思う。二人は互いの欠点を埋め合うことができた。だから親友になったのだと思う。僕はこの作品の続きの「羊をめぐる冒険」を読んでみたが十年以上二人の友情は続いていた。恋愛や友情や夏が終わる喪失感、そういうものに悩みながら主人公たちは生きている。でも結局、エピローグでは主人公は幸せを掴んでいて、恐らく昔の悩みなんて笑い話になっているのではないかと思う。僕は話のエピローグと言うものが好きだ。なぜなら多くの場合、エピローグで、人々は何らかの幸せをつかんでいるからだ。たとえどんなにもがき苦しんでも最後には幸せが待っている。そんな考え方をした方がずっと楽だ。そうすればつらい夏でも乗り越えて行けると思う。そして幸せなエピローグになって今の悩みも笑い飛ばせればいいと思う。

『ジョゼと虎と魚たち』

田辺 聖子 著

見えない壁を破るとき

I E 名加 玲奈

うだるような暑さの中、また今年も小学生のときから続く読書感想文を書くために本を読まなければならない。いつも何を読むか考えるだけで日々が過ぎ、結局は純文学に収まっていたが、今年は自分の読みたいものを見つけようと考えつつも面倒になり、家にあった田辺聖子さんの作品に手を伸ばし読むことにした。

短編がつつらとあり読み進めていく中で、私の心を捉えたものが「ジョゼと虎と魚たち」であった。

冒頭でいきなり「脳性麻痺」という活字が目飛び込んできて、一瞬暗い気持ちになったが、コテコテの大阪弁で話し言葉が書かれてあり、少し気持ちが晴れた。「ジョゼ」と自分のことを名乗る脳性麻痺を抱えた二十五歳の女性と、管理人こと大学生の恒夫とのテンポのいい大阪弁の会話で展開していく。

どうやら新婚旅行中であるらしく、健常者の男性が、障害を持つ女性とどうして知り合い、永遠を誓い合うまでに至ったのか興味をそそられた。ジョゼは実に高飛車な物言いで、恒夫に遠慮がない。いろんなことで恒夫に世話をしてもらっているはずなのに、なんてことが頭をよぎった。

ジョゼは両親に捨てられ、十七歳までを施設で、その後祖母に育てられたようだ。その祖母も下半身の不自由なジョゼの存在を他人に見られたくなく、隠すように乳母車に乗せ、あたりが暗くなってからしか外出をしなかった。幼少の頃も、就学免除で学校にも入らず、介護ボランティアの人ともコミュニケーションを図らず、孤立していく様はなんとなくうなずけた。

そんなジョゼに転機が訪れる。恒夫との出会いだ。通り魔に襲われかけたところを助けてもらったのだ。恒夫は、障害を持ち、美しい顔立ちで、それで

いて高飛車なジョゼになぜか興味がわき、次第に家に入出入りするようになる。ごく普通で順応性のある恒夫。人あたりの良さでか、ジョゼと祖母に代わって、役所の福祉の人に、家に手すりを付けたりする交渉をしたりもしている。段々と心を開いていくジョゼ。生まれて初めて接した、自分と同じくらいの年頃の男性。恒夫に恋心が芽生えているのが、わがままで奔放な話し口調から伝わる。受け入れてもらえる喜びと、いつ失うかわからない哀しさが感じられ、切なくなる。そんな時に、大学生の恒夫の就職活動が上手くいかずジョゼと疎遠になっていく。やっと就職が決まって再びジョゼに会いに行くと、祖母が死に、引越しをしていた。ひとりでひっそりと暮らしていたジョゼは、恒夫が会いに来たことを心の底から喜んだに違いない。でも強がりでもなかなか素直になれず、追い返しかける。孤独で寂しい、でもなかなか素直になれない。憎まれ口をたたいてしまう。来てくれて嬉しいのに、「……二度と来ていらん。」と涙をためながらすがりつく様子に、もう心の壁は透明になりつつ消えゆくのかと思った。

二人は結ばれる。すごいと思った。身障者のヒロインが、男女関係を築いていくことをさらっと表現し、しかもごく自然に読まされている。私の今までの、障害を持った人たちに対する考え方が弾けた。なんとなくかわいそうな人たち、という偏った見方や、的の外れたボランティアは、人を傷つけてしまうように思えた。ごく自然な心の動きを、自分たちもぶつけていかないと、何も変わらないのだ。この小説は恋愛小説だと思われるが、もっと深い人間愛を語っているように感じた。本来の人間の付き合い方が、ここにある気がする。もうジョゼの障害のことが吹き飛んでいた。一人の女性として幸せを願ってしまう。最後の方の、「完全無欠な幸福は、死そのものだった。」の言葉にうなずきながら本を閉じた。

『風が強く吹いている』

三浦しをん 著

「走る」を通して

1 C 黒田 寛人

僕は走ることが好きです。朝や夜に走ることになっています。走っていると気づかされることが多くあります。いつも通っている見慣れた道もまた違ったものを感じられます。

ある朝、走っている時おじいさんから

「おはよう。」

とすれ違いざまに声をかけられたことがあります。そのとき一人で黙々と走っていて空虚感に包まれていたのですがおじいさんの一言で晴れ晴れとした気持ちになりました。このとき僕は何気ない一言で相手を嬉しくさせることができることを学びました。

また、ある時には、朝早くにゴミ拾いをしている人に出会いました。日頃通っている道をきれいにしてきている影の存在に気づかされました。そして、いろんな人がこうして社会を支えていることに気づきました。

そして、僕はこの夏ある一冊の本を読みました。

陸上、ましてや長距離走を知らない竹青荘の住人が箱根駅伝を目指すという夢のような話です。箱根駅伝は、毎年一月二日から三日にかけておこなわれ、往路百八キロ、復路百九.九キロ、総合で二百七.九キロを十区間に分けて十人で走りつないでいく競技です。十区間の中には「花の二区」と称されるエース区間や、山登りの五区、山下りの六区、裏の二区または復路のエース区間とも言われる九区などバラエティに富んだコースがあります。

住人たちはみな箱根駅伝を走っている最中に心の中でいろいろな思いにふけます。自分の人生について反省したり、うまく関係がとれない家族のことを考えたり、あの子はいったい誰が好きなんだろうと恋について考えたり。走るということを通して自分と向き合うのです。

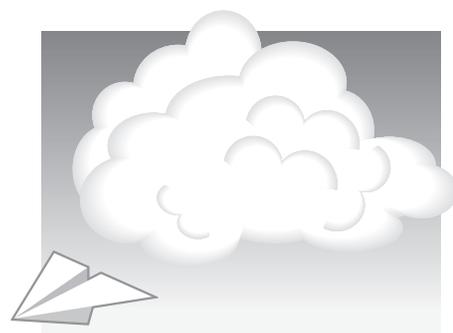
僕も走っている時物思いにふけることが良くあります。

走るとはなんだろう。なぜ自分は走っているのだろう。苦しいことは分かっているのに。苦しいなら、立ち止まればいいのに。そう思ったことが何度もありました。誰かに言われたわけでもない、走らないといけないわけでもない。なのに、どうして自分は走っているのだろう。走ることが好きだといっても、ここまでするのは変じゃないのか。僕のこうした疑問に物語の主人公は答えてくれました。それは走るのがただひたすら好きだから。そして、走ることによって行き着くことの出来る世界にいきたいから。僕は主人公の言葉にはっとさせられました。

僕はアスリートを気取るつもりはないけれど、知らず知らずのうちにその世界を目指していたのかもしれない。走っていると感じられる、自分だけがまるで別世界にいるような感じをただひたすら味わいたいから僕は走っていたのかもしれない気がします。

また、走るということは、その人の性格を表しているように思います。誰よりも速く、けっして抜かれないという人もいれば、おそくてもどこまでも走り続けたいというひともいます。また、走ることが嫌いな人もいます。そういうことから他人と張り合う、マイペース、しんどいことが嫌いというような性格をうかがい知ることが出来ます。

「走る」を通してこれからもいろんなことを学び、生活を充実させたいです。



『風が強く吹いている』

三浦 しをん 著

『強い』とは

—「風が強く吹いている」を読んで—

1 C 松下 由賀子

「走るの好きか？」コンビニで万引きをして、逃げるために走っている時、後ろから追いかけてきた灰二（はいじ）という男に走（かける）は問いかけられた。四月から寛政大学に通う走は、お金も使い果たし野宿をしており、灰二は自分が住んでいる竹青荘（ちくせいそう）の空き部屋の住人を探していた。そして、その夜、走の走りを見て灰二は思った。「俺がずっと探していたのは、あいつなんだ。」灰二の強い勧めで竹青荘の住人となった走は灰二の他、九人の住人と出会う。竹青荘の住人と出会い、今まで陸上を志している人間としかつきあいがなかった走は、地面を蹴って走るという呼吸するよりも自然で当たり前の流れだと思っていたことが、そうではないひともいることを知る。走れる力がありそうなのに、走ることにまったく興味を示さずに生きてきた、双子のジョータとジョージやムサ、神童、ユキ、キング。故障やブランクによって、思うように走れずにいる灰二とニコチャン。脚のある動物にとっての基本行為とも言えるのに、走ることがいやでたまらないらしい王子。この素人ばかりの十人が、走が竹青荘にやって来てから灰二が強権を発動し宣言した「十人の力を合わせて、スポーツで頂点を取る」という言葉により、箱根駅伝に出るという無謀なことに挑戦する。

私は初めてこの小説を読んだ時、走と同様に竹青荘の住人があの有名な箱根駅伝に出ることはありえないと思った。そんな陸上を大学生になってから始める人が出れる大会なのかと思った。テレビで見るとスッスッと簡単に走っているように見えるが、この本を読んでいると、そんなに簡単なものではなく過酷なものだと身にしみた。それなのに、なぜか強

い確信を持って、竹青荘の住人を引っ張っていこうとする灰二をすごい人だと思う。私はそこまで強い確信を持って何かに取り組むことはできないなと思う。いつもどこかで、失敗する自分や後悔する自分を思い浮かべているのかも知れない。

私が印象に残っている言葉は次のような言葉である。「長距離選手に対する、一番の褒め言葉がなにかわかるか」「速い、ですか？」「いや、『強い』だよ」走は、竹青荘の住人と箱根を目指して練習することによって、強いとは何かを見つけていく。私が先ほど書いたようなことを思うのは、灰二の言う『強さ』がないからではないのかと思う。一生懸命最後まで物事に取り組む強さ、何かあってもぐっと我慢する強さ、しんどくても前に進む強さ。口で言うのは簡単なことだから、私はよく目標を書く時に「一生懸命あきらめずにやる。」ということを書いてしまう。しかし、これはやってみるととても大変なことであることがわかる。だから、途中でやめてしまう。それがずっと続く。それを止めるためにも『強さ』が必要だ。

私は、現在陸上競技部に所属している。そして偶然にも、竹青荘の住人同様、この四月から中長距離を始めたばかりである。私は、あの言葉を見るまでは速いことが一番だと思っていた。しかし、灰二のいう『強い』ことの方が大事だと気づくことができた。私の高専生活はまだ始まったばかりだ。これから、この『強さ』の意味を実感できるように走ったり、勉強したり、様々なことに挑戦したりしたい。

『カラフル』

森 絵都 著

生きるということ

2 S 光崎 将人

死んだはずの魂が生まれ変わった!? 自分で死を選ぶという大きな過ちを犯した罪な魂の持ち主であ

る僕。通常なら輪廻のサイクルから外されるはずが、神様の気まぐれから再挑戦のチャンスを与えられた。

二度と下界に戻りたくないと思ふ僕の心をよそに、ガイド役の天使プラプラに導かれて「再挑戦」は始まっていく。「再挑戦」とは何か？それは前世で失敗した下界で、ある一定期間全く知らない誰かの体を借りて過ごし修行（ホームステイ）を積むことだった。

修行が順調に進むと、ある時点でおのずと前世の記憶を取り戻すことになっている。そして前世で犯した過ちの大きさを自覚したその瞬間にホームステイは終了。僕の魂は借りていた人間の体を離れて昇天し、無事輪廻のサイクルに復帰できるのである。

僕が送り込まれた先は三日前に服毒自殺を図った少年、小林真の体だった。危篤状態の彼の魂が天に昇る瞬間に僕の魂が真の体に入りこみ、そして真は息を吹き返した。よみがえった真の姿を見て家族は神に感謝し大喜びする。こうして仮の4人家族としてホームステイは始まった。そして日々の生活の中で家族や友人、また様々な人とのかかわりを通して「今を生きている」ことを彼は実感していく。その結果、全くの他人だと思っていた真が本当は自分自身だったことや自分の犯した過ちは何だったのかということに気づき、輪廻のサイクルに戻ることなく自分が中断した人生を再び生きていくことになる。

なぜ神様は真の魂に再挑戦するチャンスを与えたのだろうか？それはもしかしたら真が自分の大切な命や人生を途中で手放してしまったからかもしれないと思う。これは真の犯した過ちの一つである。誰にでも、もちろん僕にも悩みがある。困難に出くわすこともある。

そんな時に真は自分の殻に閉じこもって自分だけの世界で生きることを選んだ。そしてついには耐えきれず生より魅力的な死を選んだ。では真にとって果たして死とは苦しみや困難から逃れる唯一の方法だったのだろうか？僕はそんなことは絶対にないと

思う。確かに人生には自分ひとりではどうにも出来ない悩みや困難もあるだろう。そんな時にも決して絶望せず明るい希望のかけらを探して生きていくことが大事だと思う。自分自身で何の努力もしないで今の自分の状況を嘆くだけなら、死ぬほどの気持ちがあるのならその気持ちをバネにして一歩ずつどん底から這い上がっていきたい。そして、もしも僕の周りにそのように心が折れかかっている人がいたら、僕は何とかして支えてあげたい。そして一緒に希望のかけらを探そうと思う。人は決して一人きりではないということ、周りを見てみれば必ず手を差し伸べてくれる人もいるはずだと伝えたい。大切な命を、人生を手放してしまったら二度と取り戻すことは出来ないのだと伝えたい。また、もうひとつの真の犯した過ちは、家族をはじめ自分を取り巻く人々に決して正面から向き合わずにいたことだろう。自分の気持ちを正直にそのまま相手に伝え、相手の気持ちも心の真ん中で受け止める。こんな当たり前のことすらおろそかにしていたことだ。僕はボーイスカウトの神道章の研修で「人は一人の力で生きているのではない。周りの人々に支えられてこそ生きることが出来るのだから、常に感謝の心を持つことが大切だ」と学んだ。本当にその言葉の通りだと思う。自分を支えてくれている人の心を思えば、命の重さ、大切さも自然と身にしみてくる。

“生きる”ということにはとても大きな幅があるのだと思う。ただ無為に一日を過ごすことも、心を響かせて一日を過ごすことも、同じ“生きる”という言葉だが、その中身には大きな違いがある。また自分の心のあり方によって物事がたった一色ではなくて、角度しだいで実にいろいろな色を秘めているように見えるのかもしれない。この本のタイトルのように「カラフル」なのである。僕の人生が単色ではなく、どれだけカラフルに色付いたものになるのかは今はまだ分からないけど、僕は自分の人生を一生懸命に生きていく。

『十五才』

山田 洋次 著

十五才を読んで、 十六才が思ったこと

2 I 土井 猛

どうして、学校に行かなければいけないのか。明るくて素直で、聞き分けが良くて……そんな子だけがいい子なのか。そう疑問を持つ主人公の中学生、大介は半年間学校に行っていない。ある日大介は、小学校の教科書に載っていた、何千年も生きた屋久島の縄文杉を目指し旅に出る。学校では大人になってから役に立ちそうにないことを勉強させられ、父親は自分のことを駄目なやつだと思っているのだろうと考えていた大介。しかし、旅の途中、ヒッチハイクをしたことで出会ったトラックドライバー、縄文杉を見に屋久島へ来た女性、屋久島で一人暮らしをしている老人……色々な人との出会いを通し、大介の心境には変化が表れる。そして、大介と出会った人たちの心にも変化が表れる。大介は学校が何故あるのか、などの子供特有の疑問も抱えていた。旅の途中で出会う大人たちも、大人特有の問題を抱えていた。この疑問や問題も、出会いを通して少しずつほぐれていく。子供にだって、疑問は多くあるし、親に反感を抱いたりする時はある。僕だってそうだ。この本の主人公は中学生。僕は高校生。歳が違って、やっぱり疑問は溢れてくる。親に対して嫌な気持ちを持ってしまうことだってある。逆に、親はどうだろう。あくまでも僕自身の考えだが、親は目の届かない場所で子供がどうしているか心配し、疑問に思うだろうし、子供がどう考えているのだろうかという疑問もあると思う。親が何を普段思うのか、僕にはあまり分からない時もある。何を考えているのか……そう思うのも、疑問の一つ。学校に行くことが当たり前だと思って、行く意味について全く疑問を持たない。そんな考えをする人もいるだろう。

だが、人生は、学校に行って勉強して、卒業したら会社に行ったり進学したりと、「当たり前」で済まされるものばかりなのだろうか。「当たり前」だから行く・する。そういう意味だけでなく、一つの出来事には違った意味があるのではないかと思う。例えば、ただ勉強するのが「当たり前」だから学校に行く。それ以外にも、学校に行く意味はあると思う。大介は、明るくて素直で聞き分けが良い子が良い子なのか、という疑問を持っていた。だが、それ以外にも良い子はいる。明るい、素直などの「当たり前」のようにプラスの意味に捉えられる要素が欠けていても、「良い子」はきつっている。劇中に、トラックドライバーの息子の、引きこもりの青年が書いた詩がある。「ほとんどの奴が馬に乗っても、浪人は歩いて草原をつつきる。早く着くことなんか目的じゃないんだ。雲より遅くてじゅうぶんさ。この星が浪人にくれるものを見落としたいくないんだ。葉っぱに残る朝露、流れる雲、小鳥の小さなつぶやきを聞き逃したくない。だから浪人は立ち止まる。そしてまた歩き始める……」という詩である。馬に乗り急いでいると、見えないものがある。人生には、急いでいると見えないものがあるが、浪人はそれを見ることができた。それを見ることができるのは、ゆっくりと一步一步、自分の足で歩いている人だけなのである。「当たり前」というものに流されて、周りに流されていく生活。生活には色々なタイプがあるだろう。どのタイプの生活も一概に悪いということとはできない。どんなタイプの生活にも、良い所はあるのだから。だが、詩中の浪人のように、ゆっくりでも良いから、自分の足で……自分の信念を持って前に進む生活。これは良い生活だと思う。自分の信念を持って、少しずつでも良い。前へと一步一步進んでいく。そうした時、「当たり前」だと思っていたことが、違うように見えてくるかも知れない。今まで見えていなかったものが見えてくるかも知れない。……いや、見えてくるだろう。

『カラフル』

森 絵都 著

「黒・白・赤・青・黄……………」

2 C 加藤 豊

僕はもう、生きていく気力を無くしました。

学校でいじめられ、その後も疎外され続けた僕にとって、家族は数少ない救いの一つでした。しかし数日前、僕は、尊敬していた父さんは、自分のことしか考えていない利己的な人間なんだと気づき、母さんが不倫相手とホテルに行くのを見ました。兄さんは僕のことを落ちこぼれの邪魔な弟だと考えています。…もう嫌です。僕は今日でこの世を去ります。僕が死んでも、皆僕のことをすぐに忘れるのでしょうか。さようなら。

自殺した「真」は、こんな遺書を残していたかもしれない。(間違っても僕の遺書ではない。)

僕は「カラフル」という本を読んだ。主人公の「ぼく」は、生前の罪により、輪廻のサイクルから外された魂であったが、天使業界の抽選に当たり、自殺を図った少年、真の体に入り、一時的に真として生きていく過程で、自分の罪を思い出すことができれば、輪廻のサイクルに戻してもらえることになった。

「ぼく」が真の体に入って間もないころ、「ぼく」は、真の記憶の中の家族の人物像を天使から知らされ、ひどい嫌悪感を覚える。しかし、「ぼく」がその人々との生活を重ねていくにつれて、その人物像は間違っていたことに気付いてくる。真の父は、恩や義理もある会社の上司が会社の失敗の責任を取り総辞職したおかげで昇進できたことに飛び上がって喜んだ。思いやりのある人間なら、気の毒がるところだが、真の父はそうではなかった。真は地味でもこつこつ頑張っている父を尊敬していたから、父に対する失望は大きかっただろう。しかし、本当は、不正を行っていた社長や重役と二年間戦い続けて、やっと会社を一新させる希望ができたことに真の父は喜んでいたのであった。やはり真の父は人を思いやる

ことができる、正義感のある尊敬すべき人間だったのだと感じた。また、真の母は、家族を裏切るという取り返しのつかないことをしてしまったが、その後の悔やみ苦しんでいる様子や、息子（「ぼく」の魂が入っている真）に責められても、逃げることをせず向き合い、家族のことを第一に考えて行動しようとしている様子を見て、平気で人を裏切るような人物ではなかったんだな、と僕は読んでいううちに思い直すようになった。「ぼく」も、最初は軽蔑していた周囲の人々を、こんな風に見直していったのだろう。

人間は一色ではない。誰かをいじめたくなる時もあれば、誰かを助けたくになることもある。どうしようもなく何かを壊したくなる時があれば、人や物が誕生することに感動を覚える時だってあるだろう。このようなさまざま「色」が合わさって、人というものができているのではないだろうか。沢山の種類の絵の具を全て混ぜると黒に近い色になる。あの人は黒色だ、と悪いイメージを人に抱いたとする。しかし、その黒には黄や赤などさまざまな色が含まれているかも知れないのだ。真は、「色探し」が下手な少年だったのだと僕は思う。人の中の暗色にばかり気を取られ、極めつけは、自分自身の色さえうまく探し出せず、自殺まで追い込まれた。「ぼく」の生前の罪というのは、自分を殺したこと、つまり、真イコール「ぼく」というのが、物語のおちなのだが、真に無くて、「ぼく」になってから手に入れたものは一つ、「色探しの技術」だけなのだ。

真はたまたま抽選に当たったおかげでこの世に戻ってこれたが、当たらない可能性の方が高い。僕は、運の無い方なので、しっかり「色探し」して、自分や皆の暗色や明色をみつけ出していこうと思う。

『人間失格』

太宰治 著

「人間失格を読んで」

（「人間の資格とは何か」より改題）

2 C 松本 明日香

「恥の多い人生を送ってきました」「人間、失格」この小説の中でも特に印象に残り、なおかつ有名な言葉はこの二つであると思う。葉蔵が自分を否定し、他人と違う価値観を持つがために他人に恐怖し、苦悩してきたことが綴られている手記の中でもそれを象徴したものである。

しかし、葉蔵は本当に人間を失格した存在だったのだろうか。私は葉蔵が自分から「人間であること」を厭っているように見えて仕方がない。自分を否定する言葉の裏で「他人とは違う特別な自分」、「俗で醜悪な欲にまみれた人間社会を離れたところにいる自分」を好み、欲しているように感じるのだ。そしてこの葉蔵の姿は太宰治そのものであるのではないかと感じた。他人と違うことに苦悩する一方でそうあることを自分から望み、そんな自分を否定する反面俗なものから離れている自分に安心している。その矛盾が彼を道化に仕立て上げ、廃人に至らしめたのだろう。不安を感じ、孤独を恐れ、思い悩むというのは人間本来の姿である。葛藤や矛盾は人間であるからこそおこるのだ。葉蔵が恐れていたのは、純粹であるために俗悪な人間社会に浸ることができず、人間であるのに他人と同じように世間に溶け込むことが出来ないことで、だから自分を人間とは離れたところに置きたかったのだろう。

葉蔵に足りないものは何だったのだろう。人を信じる心だとか愛だとか心から笑いあえる友だとか、そういうものだろうか。それとも自分の本心を出せる勇気や強い心だろうか。私は違うと思う。もちろんそれらも大切なことだが、もっと根本的に、葉蔵に足りないものは自分を愛し認めることだったと思う。もし葉蔵にそれがもう少しあったなら、自

分を作りすぎることはなかったし、人を愛することも堂々とできたと思う。自分をさらけ出せないのは自分を認められないからだ。もし自画像を竹一以外にも見せることができたら、周囲に絵の才能を認められ美術学校に入れていたかもしれない。自分に自信があればシゲ子の本当の父親になってシヅ子と三人で暮らそうと思うこともできたかもしれない。少なくとももう少しは「人間らしい」生活を送れただろう。自分を過度に偽ることもせず、彼の言うところの「道化」としてではなく、「人間」として生きていくことが出来ただろうし、「綿で怪我をする」ような弱虫にはならなかっただろう。

私がこの小説を読んで一番心に残ったのは第三の手記の最後の部分の「ただ、一さいは過ぎて行きます…」というところだ。その通りこれが真理なのだ。それなのになぜかとても哀しく感じられて仕方がない。強引に納得させられて諦めさせられるような、どうしようもない気持ちにさせられる言葉なのだ。しかし、マダムは手記を読んでも葉蔵のことを「神様みたいないい子」だったと言っている。これで葉蔵は救われたと思う。道化ではなく、本当の自分を告白しても拒絶せず、そんな風に言ってくれる人がいるのだ。自分を知ってほしい、認めてほしいと思ったからこそ葉蔵は手記を送ったのだろうから。

『悪童日記』『ふたりの証拠』『第三の嘘』

アゴタ・クリストフ 著

悪童日記三部作を読んで

3 E 西村 佳那子

悪童日記三部作とは、アゴタ・クリストフ著『悪童日記』『ふたりの証拠』『第三の嘘』をさす。三作品は、第二次世界大戦末期から大戦後を時代背景としている。小説の中で、アゴタが見聞きした事実と小説の中の嘘がめまぐるしく交錯する。事実とは何か、嘘とは何か。この小説はこの二つを深く考えさ

せられる小説であると思う。何度読んでも三部作を自分の心にうまく仕舞えないもどかしさを感じてはいるが、人生で最後になるであろう読書感想文を、この三部作で書いてみようと思う。今の私が感じたことや考えたことを文章にするという単純な行為が大きな意味を持つのは、未来の私にそれが必要であるからだ。何十年かのち、私が現在よりもっと成熟した考え方や捉え方が出来るようになったとき、初めてこの三部作とアゴタ自身に近付けるのかもしれない。

『悪童日記』は双子の男の子「ぼくら」が綴る日記である。題名にも書かれているように、「ぼくら」は悪童である。私は、読むたびに双子の恐ろしいほどの純粹さを感じる。しかし、純粹さという言葉が「ぼくら」に相応しいものなのか私には今も分からない。双子をひとことで表せる言葉が見つからないのだ。純粹さは時折バランスを崩し、闇へと手を伸ばす。おそらく、秘めた闇は何よりも恐ろしい。いつどんな時でも「ぼくら」は「ぼくら」でしかなく、それ以上も以下もない。それとは違い、私は私でしかないが、存在する場所によって異なった呼び名を与えられ、他人から私という個人を認識されている。単一な存在であった「ぼくら」が「ぼくら」でなくなったとき、即ち、「ぼくら」が複数の存在を見出したとき、『悪童日記』は突然幕を下ろす。

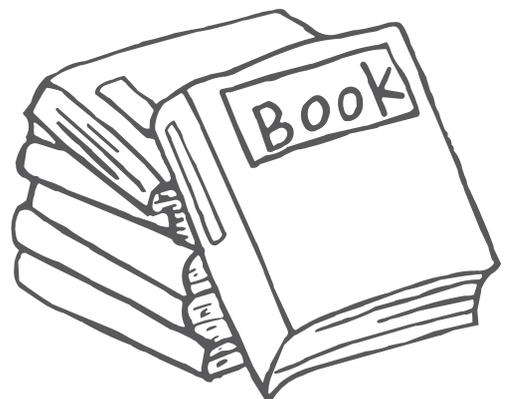
『ふたりの証拠』は、個人という単一の存在を得て歩みだした双子の片割れリュカ（LUCAS）が綴る物語である。あくまでも、物語はそういう形式を取っている。私もそうであったように、第二作のラストには誰もが驚愕するだろう。これもまた『悪童日記』と同じだが、私には『ふたりの証拠』のラストを驚愕というひとことでは言い表せない。他にもっと似合う言葉があるような気がしてならないのだ。ふたりの証拠を残そうとしたのは、リュカではなく双子の他方クラウス（CLAUS）であった。最後の数ページで提示されたのは、嘘である。しか

し私は、その数ページ前で、亡命経験を持つアゴタ自身が綴る事実を見付けたような気がする。

「金銭を基本として成り立っている社会なんです。人生に関する問題の入りこむ余地はありません。私は、三十年間、死ぬほど辛い孤独のなかで生きました」

三作目の題名は、『第三の嘘』。そう、嘘である。同じ出来事について、真実と嘘が混在することはできない。だから、二作目が嘘だと種明かしされた瞬間、一作目と二作目が嘘となった。第三の嘘とは何なのだろうか…。双子の兄弟の物語は、真実と嘘の両方で成り立ち、進んでいたのだろうか。

三作を通してアゴタの文体は変わらない。物語の文章の中に、登場人物の感情描写は一切無い。そして、彼女の文章は決して着飾ったりしない。そんな簡潔すぎる文章が、多くのことを感じさせ、考えさせようと私の中に入り込んでくる。きっと、真実を認められないとき、人は嘘をつく。真実を真実だと受け止めることよりも、嘘をつく方が遥かに楽だからなのだろう。しかし、事実は事実でしかない。嘘のように七変化させることはできない。だからこそ、真実とは何かを考え、真実だけを掴んで歩きたいと思うのかもしれないが、独りぼっちでは立ち上がられない時だってあるだろう。事実を事実だと認めることは、きっと何よりもつらい、のかもしれない。



学生会図書委員による

ブックガイド



「読者が登場人物を見守る温かさ」

2 S 菅原 惇史

私が今最も注目している（気に入っている）作家の作品について紹介したいと思います。辻村深月という作家です。簡単に紹介すると二〇〇三年に「冷たい校舎の時は止まる」という作品で第三回メフィスト賞を受賞してデビューした若手の作家です。

この人の作品の何が凄いかというと叙述トリックが恐ろしく上手いんです。読んだら終盤の方（中盤の時もありますが）で明かされる真相に絶対に驚かされます。一口に叙述トリックと言ってもこの人の場合のそれは作中に嘘を混ぜたりするような卑怯なそれとは違います。読み直せばちゃんと書いてあるんです。でも、気付かないんです。それも一人称から見ての叙述トリックです。絶対に驚きます。少なくとも私は驚きました。

と、前置きが長くなってしまいました。私はこの人の技巧について書きたいわけではないのです。この人の作品の内、幾つかの作品はリンクしています。といっても、シリーズ物ってわけじゃありません。ある作品の中に他の作品の登場人物が少し登場したりして、時にはその作品の主人公と会話したりもします。ですから、シリーズ物でよくあるように人間関係を描くのを楽しんでいるというわけではありません。その作品での主人公はしっかりいますし、他作品から出てきた人物にとっては後日談（前日談のときもあります）になるわけです。その趣向が嫌いな人はもちろんいると思います。その一つの作品で完結している方がいいという考え方はもちろん理解出来ます。ですが、私はこの趣向はかなり好きです。何というか温かいんですね。あの作品のあの人物はこんな風に成長したのか、だとか、この人物はきちんと成功したんだ、だとか、この二人はやっぱりくっついたんだ（俗な表現で申し訳ありません）だとか分かるというのは気持ちの悪いものではありません。読者が作品中の登場人物を温かく見守っているような気持ちにさせる出し方はなかなか出来ないと思います。

後、先程シリーズ物がどうのこうのと書きましたが決して非難しているわけではありません。私は今森博嗣のS&Mシリーズを読んでいる途中なんですけどどこかリアルが足りないんです。普通の一般人がこうも何度も殺人事件に遭遇するだろうか。もちろん、トリックは牙えわたっていますし、内容は面白いんですけどね。この辺の意見については伊坂幸太郎の「オーデュボン」の祈り」を読んだら成程と思うと思います。ですから、刑事が主人公のシリーズ物には割と寛容になれるのですが、主人公が偶然、何度も巻き込まれるというのは非現実的だなと思うのです。出来れば、主人公も事件の関係者でっていうのが個人的には大好きですね。

最後に長々と読んでいただきありがとうございます。（本当ならもう少し長々と書きたかったのですが……）

図書委員会活動報告

読書週間行事

(10月26日から11月19日まで 於：本校図書館)



全国読書週間の期間に合わせて、毎年実施している読書週間の展示。高専祭や修学旅行の時期と重なるため、今年度は期間を延長して10月26日から11月19日という3週間以上にわたって行いました。来年度以降も同様に期間を長めに設定して行う予定です。今年度のテーマは「作家のデビュー作」でした。(読書週間行事の展示の様子は表紙写真にもあります。)

Information

あれ！？変わった！？

その1 お気づきの人もいると思いますが、**図書館入口の荷物置き場**の配置を変えました。以前は学生で混み合うと荷物を置きにくい状態で、試験前などはカバンを床に放置する学生も多く見られましたが、これで荷物が置きやすくなりました。

その2 図書館入口と大視聴覚室の間にある**鍵付きロッカー**。これまではカウンターに申し出た上で、皆さんに利用してもらっていましたが、1月から申し出は不要になりました。百円玉を用意して、直接ロッカーに荷物を預けてください。**その百円玉は使用後戻ってきます。取り忘れのないように。**なお、利用は当日限りです。

その3 残念なことに、これまで図書館あるいはLL教室を利用した際に「傘がなくなった～！」という学生がいました。そこでこの度、図書館と総合情報センター入口に、**鍵付きの傘立て**を設置しました。これも当日限りの利用になりますが、盗難防止のためにも、遠慮なく利用してください。

図書館ではセキュリティのため、貴重品や必要なノート・筆記具以外の持ち込みは禁止されています。**カバン等は荷物置き場かロッカーにきちんと入れる**ように、ご協力をお願いします。



編集後記

本年も多くの読書感想文ありがとうございました。また、入選者の皆さんおめでとうございます。

読書をする、一つの物語に触れることで、人間の心理を知ることができます。多様な考え方を知ることは、豊かな人間関係を築き、人生を愉しくしてくれます。

2010年は国民読書年です。この機会に是非、読書に親しんでください。図書館で沢山の良書が待っています。

(図書館)

奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <http://www.nara-k.ac.jp/jimu/library/>



奈良高専
Nara National College of Technology



この冊子の印刷には、環境に優しい大豆油インキを使用しています。